

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association of soap use when bathing 18-month-old infants with the prevalence of allergic diseases at age 3 years: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

生後 18 か月での入浴時の石鹸使用と 3 歳時のアレルギー疾患との関係: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 富山ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Pediatric Allergy and Immunology

年: 2023 DOI: 10.1111/pai.13949

筆頭著者名: 加藤 泰輔

所属 UC 名: 富山ユニットセンター

目的:

小児のアレルギー疾患は早期のアトピー性皮膚炎の発症に続いて食物アレルギーや気管支喘息などを発症する、いわゆるアレルギーマーチの形をとることが多い。そこで、皮膚のバリア機能に影響を及ぼす可能性のある入浴時の石鹸使用の頻度とその後のアレルギー疾患発症の関係を明らかにすることを目的とした。

方法:

本研究はエコチル調査の一部のデータを用いて解析した。具体的には、全国 15 か所に居住する妊婦をリクルートし、出生した子どもの 18 か月時点での入浴習慣(入浴回数や石鹸使用頻度など)と生後 3 歳時点でのアレルギー疾患(医師による診断)との関係について、種々の交絡因子を含めて多変量解析を行なった。

結果:

74349 名の子どものみを対象とし、18 か月時点での石鹸使用頻度で対象者を 4 群(毎回使う、しばしば使う、たまに使う、ほとんど使わない)に分類した。その子どもたちが 3 歳になった時点でのアレルギー疾患の有病率を検討したところ、生後 18 か月時に石鹸使用頻度が少ない群では 3 歳時のアトピー性皮膚炎の罹患率が有意に多かった(「毎回使う」に比べて「ほとんど使わない」の調整オッズ比は 1.99)。また、食物アレルギーに関しても同様の結果であったが、気管支喘息とは有意な関係は認められなかった。

考察(研究の限界を含める):

乳児期早期の入浴時の石鹸使用頻度が少ないことと、その後のアレルギー疾患有症率との間に有意な関係が認められた。石鹸は表面活性剤の影響で皮膚のバリア機能に影響するリスクがある一方で、皮膚の病原菌を除去して細菌叢を安定化させる効果もあり、今回の結果からは後者の影響が大きかった可能性がある。また、生後 18 か月時点で未発症の子どものみを対象としたサブ解析でも同様の結果が得られたことより、既にアトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患を発症している場合に入浴時に石鹸使用を抑えることの影響は除外できたものと考えられる。

結論:

乳児期早期から入浴時に石鹸を使って皮膚を清潔に保つことがその後のアレルギー疾患(特にアトピー性皮膚炎と食物アレルギー)発症のリスクを軽減する可能性がある。しかし、実際の効果については介入試験等を行なって明らかにする必要があると考えられる。